

技を知る：
音と音楽による地域社会とのコミュニケーションを通じて

メタデータ	言語: ja 出版者: 静岡大学教育学部 公開日: 2013-04-12 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 小西, 潤子 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10297/7136

技を知る

音と音楽による地域社会とのコミュニケーションを通じて

小西 潤子

はじめに

これまでの大学教育においては、教員の直接的な指導によりさまざまな「技」の習得が行われてきた。この方法は、初学者が技の基本を身につける効率的な伝授法として、今後も継続されるべきであろうが、ただ学生が受身的な態度で臨みがちになる欠点もある。もちろん、これまでも学生には、教育実習など学外で自らが習得した技を試行し、評価され反省する機会が与えられてきた。しかしながら、昨今の学校現場を取り巻く深刻な事態に対応できる教員となるためには、技へと向かっていく積極性が求められるのではないだろうか。

本研究を通して提唱するのは、学生自らが技を見出し、それを身につける方法を考えて実践・努力していくこと、そして大学教員は学生から潜在する積極性を引き出し、学生と子どもたち等を結びつけるマネージメントを行うという「学生支援型」の教育方法である。今年度は、その予備的段階として、学生と技との出会いを支援することから開始した。学生自らが技を見出すといっても、実際にはどのような技があり、いかにそれに近づいたらよいかかわからない。さまざまな技とその有り様を知ることが目的に、音と音楽を通じての地域社会と接触・交流の機会を設けて、学生に参加を求めた。すなわち、

1) 「来・て・こ de 夏休み」ロビーコンサート

2005年8月6日、静岡市健康文化交流館「来・て・こ」

2) ミニコンサート「これもオペラだったんだ!？」

2005年10月23日、パルシェ

3) 「静岡大学茶歌プロジェクト・音楽パフォーマンス」

2005年10月29～30日、静岡市立日本平動物園

4) 「静岡音楽茶ロン」

2005年11月17日、グランシップ交流ホール

5) 「水と器」

2006年1月23日、付属静岡小学校

6) 「箏講習会」

2006年2月14日・24日、教育学部 E201 教室

である。

これらのイベントは内容的にも多様であり、また参加した学生メンバーも参加の仕方も異なっているため、研究としての首尾一貫性がないように見えるかも知れない。ただ、いずれのイベントに際しても、学生へは参加を促しはしたものの強要したものではない。呼びかけたものの日程が合わずに参加を取りやめた学生がいたのも事実であるが、学生はある程度、自分の関心事と重なるイベントを選択して参加したところもある。技を身につけるためには、本人の意思が重要である。異なる関心事をもつ学生たちが、それぞれ「習得してみたい」と思う技を見出すには、なるべく多様な機会があって選択可能であることが、よい効果をもたらすと考えた。

以下では、参加者や関係者の声も交えながら、各イベントの概要と技の内容をまとめたい。

1 「来・て・こ de 夏休み」ロビーコンサート：ボサノヴァのリズム・耳から覚える演奏・ハワイアンに親しむ・市民団体との合同演奏

これは、静岡市健康文化交流館から持ちかけられた企画で、子ども向け参加型イベント（ほかに「大道芸」、「絵本の部屋」、「カラフルねんど」、「絵てがみ教室」、「科学遊び」など）の雰囲気づくりを目的に、同館入り口のロビーで学生による「ボサノヴァ」演奏を依頼されたものである。ボサノヴァは、1950年代の終わりにジョアン・ジルベルトとアントニオ・カルロス・ジョビンによって生み出され、1960年代前半までに大流行したブラジルの都市音楽である。音楽的には、西洋芸術音楽の音楽作法を基礎としながらも、サンバから派生した後拍にアクセントをもつリズムを洗練された打楽器奏法によって刻むことや、セブンス・コードを多用することで軽やかな転調が可能であることなどに特徴があり、歌を伴う場合にはブラジル・ポルトガル語からなる歌詞をささやくようにうたう歌唱法が用いられる。

日本では、ジルベルトやジョビンによるレパートリーも知られているが、1990年前後に日系ブラジル人・小野リサによるオリジナル曲が紹介されたことで新たなブームとなった。とりわけ、1992年春にNHK みんなのうたで紹介された《太陽の子どもたち》は、小野リサにとっての初めての日本語の歌詞による曲であり、日本の子どもとの掛け合いによってうたわれたことで、「都市のおとなの音楽」というボサノヴァのイメージを塗り替えたものと筆者はとらえている（図1）。「子ども向けイベント」とボサノヴァを結びつけるとすれば、選曲は《太陽の子どもたち》抜きには考えられなかった。

一方、学生にとってはボサノヴァを耳にすることがあっても、あまりなじみがあるジャンルではなかった。しかし、後拍にアクセントをもつリズムや転調を伴うポピュラー音楽は、小中学校の音楽教材としても、しばしば用いられている。これを機会にボサノヴァの演奏に挑戦することで、学生たちはポピュラー音楽演奏の技の一端を知ることになるのではないかと考えた。他には、同じ小野リサによるネス・カフェのCMソング《DABADA》（図2、2曲目）、ボサノヴァのスタンダード曲《イパネマの娘》を選曲した。《DABADA》は多くの人に耳なじみであること、《イパネマの娘》はブラジル・ポルトガル語によるスタンダード曲の1曲として取り入れることを提案した。

図1 《太陽の子どもたち》の歌詞

太陽の子どもたち
Music: Lisa Ono
Lyrics: Sim Amada
ひまわりの花 見上げる空に きらめく陽の光
小鳥たちは 歌をうたい 緑の森におどる
海の青さ 雲の白さ 映し出す陽の光
さかなたちも 水をかけて 波の上にあそぶ
道の石に 町の屋根に ふりそそぐ陽の光
子供たちは 手をとりあって 光の中を走る
あなたのほほを わたしの肩を あたためる陽の光
心の中に やさしいリズム メロディが生まれる
花を咲かせ 雪をとかし ほほえむ陽の光
ふしぎな力 きれいな力 神様のおくりもの
むかしも今も 世界中に かがやく陽の光
みんな光の中で生きる 太陽の子どもたち
みんな光の中で生きる 太陽の子どもたち

図2 《DABADA》収録CD

- 1 やすらぎの時-DABADA/中川 共 全米トップ100アルバム(1980年)
作曲・編曲：中川 雅郎 / 作詞：八木 正志 / 編曲：中川 雅郎
- 2 DABADA/小野リサ 全米トップ100アルバム(1990-1999)
作詞・作曲：八木 正志 編曲：自衛 高伸ら 秋田 健郎
- 3 OPEN UP/五島 良子 全米トップ100(2000)
- 4 やさしく歌って〜Killing me softly with his song〜/渡辺 美里 全米トップ100(1990-2000)
作曲：Charles Fox / 編曲：村上 正博
- 5 DABADA/サンディー&東京スカパラダイスオーケストラ 全米トップ100アルバム(1990-2000)
作詞・作曲：八木 正志 編曲：東京スカパラダイスオーケストラ
- 6 Once again it's summertime/マキシ・フリースト 全米トップ100(1990)
作詞・作曲：George H. Pouston / 訳詞：Alice Wood / 編曲：Michael Becker
- 7 つつしアワセ/沢田 研二 全米トップ100アルバム(1990-2000)
作詞：沢田 研二 / 作曲：後見 雅博 / 編曲：杉山 良樹
- 8 DABADA/マリーナ 全米トップ100アルバム(1990-1999)
作詞・作曲：八木 正志 / 編曲：佐藤 雅夫
- 9 DABADA/白鳥 英美子 全米トップ100アルバム(1990-1999)
作詞・作曲：八木 正志 / 編曲：芝田 啓夫
- 10 ヴェルディ：行け！我が思いよーオペラ『ナブッコ』より/鈴織 健 全米トップ100アルバム(1990-1999)
作詞・作曲：Verdi / 作詞：Stefano V. 999
- 11 DABADA/EPO 全米トップ100アルバム(1990)
作詞・作曲：八木 正志 / 編曲：杉山 良樹
- 12 DABADA/石川 さゆり 全米トップ100アルバム(1990-2000)
作詞・作曲：八木 正志 / 編曲：佐藤 雅夫
- 13 天使の涙/谷川 賢作 全米トップ100アルバム(2000-)
作詞：谷川 賢作 / 編曲：谷川 賢作

参加したのは、小西ゼミ所属の野田明日香（1年）、細澤こころ（2年）、高森優（3年）、伏木雄大（3年）の計4名で、主に野田がフルート、細澤がパーカッション、高森と伏木が電子ピアノを担当した。ボサノヴァの習得方法としては、楽譜に頼らずにCDを聴くことでメロディとリズムを聴き取り、自分たちの演奏レベルに合わせた編曲をすることにした。そして、音楽学演習の授業時間と一部補習時間を設けて、これにあてた。なかなか全員がそろって練習するのはむずかしかったが、静岡県健康文化館からも練習場所を提供してもらうことが出来た。

また、ロビー・コンサートには、同館で練習活動を行っているシルバー会員からなるハワイアン音楽グループ・静岡ウクレレクラブの方々も参加することになっていた。そこで、同クラブのマネージャー・浅野富夫氏と打ち合わせの機会を設けて、ジョイント・コンサートの形態とするように話を進め、2回のステージをこなすことにした。そして、ハワイアンのスタンダード曲《Fly me to the moon》演奏の際には、学生たちがその旋律にのって身体を動かすことにした。もう少し準備に余裕があればフラ（いわゆるフラダンス）の基本ステップを習得できればよかったが、今回はとりあえず「ハワイアンのリズムにのる」ところまでを目標にした。

当日は小西が参加できなかったため、学生たちによる自発的な行動が求められた。しかし、実際のところは、社会経験豊かな静岡ウクレレクラブのメンバーがリードしてステージを進行させたようであった。また、学生たちは短期間では子どもたちを惹きつけるほどの技を習得できたとはいえ、演奏にも余裕がなかったと思われる。しかしながら、人前で披露しなければならないというプレッシャーに耐えながら、未経験者ばかりのグループで新しい音楽ジャンルの演奏に取り組んだことは評価できるし、また異なるジャンルの音楽に挑むときの糧ともなろう。また、これが地域に出て行くきっかけとなっただけでなく、静岡ウクレレクラブとの交流から得られたものもあつたはずである。その後2つのイベントに際して、静岡ウクレレクラブからの参加協力を得られることになった。

写真1 静岡ウクレレクラブと静大生とのジョイント・コンサート（撮影：川嶋治子）



2 ミニコンサート「これもオペラだったんだ!？」：オペラの名曲、オープンスペースでの演奏

これは、第4回静岡国際オペラコンクール入賞者記念演奏会・瑞声^{みずおと}（瑞声実行委員会・静岡県共催、静岡市後援、静岡大学協力）の広報活動の一環として、同実行委員会学生スタッフの企画により、静岡駅前の商業施設・パルシェのオープンスペースにて開催されたイベントである。したがって、イベント自体は瑞声に属するのだが、音楽科の学生が学外でオペラの名

曲を演奏することで技を披露する場でもあったので、本プロジェクト活動の一環としても位置づけた。

入賞者記念演奏会は、浜松における国際オペラコンクール入賞者による記念演奏会として、今年初めて静岡市内で開催されることになり、県から委託を受けて静岡大学スタッフによる実行委員会が立ち上がり、その実働部隊として静岡大学学生有志からなる瑞声学生実行委員会があたった。そして、企画はもちろん、チラシ・ポスターのデザインと配布、チケット販売、マスコミをはじめとする広報活動などを含めた、企画運営すべてを担うことになった。コンクール開催地の浜松から距離的に離れていることもあり、静岡市民の間では国際オペラコンクール自体の知名度やオペラへの関心があまり高いとはいえず、ましてや記念演奏会が静岡市内で開催されることについては、企画段階ではほとんど知られていなかった。そうした中で、瑞声学生実行委員会は多くの市民にオペラに親しみを感じてもらうための企画の1つとして、このミニコンサートを実施したのである。

ここでは、日頃耳にしている曲がオペラに由来するものであることを周知することで記念演奏会・瑞声に足を運んでいただくことを目的に、幅広い年齢層の買い物客の前で、瑞声学生実行委員会の呼びかけに賛同した学生が、電子ピアノによる伴奏付でチェロ、サクソフォーン四重奏を行った。演目は、《カルメン幻想曲》《オンブラマイフ》《歌に生き愛に生き》《ラ・ウオリエ》《私のお父さん》《わたしを泣かせてください》。また、ダイレクトメール用の演奏会案内のはがきを配布した。これらは学生たちにとっても耳なじみの曲目ではあるが、日常的に演奏することがないため、本イベントがこれらに親しみ音楽的に表現するための技を磨くよい機会となった。特に子どもにターゲットを絞ったわけではないが、祝日の昼間の時間帯であったことから、演奏は大人に同伴された子どもたちの耳にも届いた。この成果もあって、記念演奏会・瑞声当日には300人近くの市民の方々が来場し、世界トップクラスの歌手の歌声に耳を傾けていただくことができた。

写真2 ミニコンサート 「これもオペラだったんだ!？」演奏風景（静岡新聞社提供）



静岡新聞 2005年10月25日掲載

3 静岡大学茶歌プロジェクト・音楽パフォーマンス：即興演奏、子どもとのふれあい、外部者との協力

これは、もともとは大槻寛、柳沢信芳、小西潤子（いずれも音楽教育講座教員）の3名が平成16年度より行っている日本学術振興会科学研究費（基盤B・課題番号16330174 および基盤C・課題番号16602004）による共同研究の成果を一般市民の前で公開し、その反応を得る

ために実施したイベントである。鑑賞を目的とせず集まった人々に向けての音楽情報発信の場として、静岡市立動物園に相談をもちかけ「秋の動物園まつり」の一環として実施させていただいた。参加した学生は、野田明日香（1年）、細澤こころ（2年）、山城郁代（4年）、寺崎庸（大学院1年）、ツォク（大学院2年）の5名であり、寺崎以外は準備や質問紙調査、来場者への呼びかけ等に当たった。

写真3 トイピアノ演奏（撮影：小西潤子） 写真4 静岡ウクレレクラブによる演奏（撮影：小西潤子）



演奏会用の設備のない野外コンサートであり、かつ動物を刺激しないという条件的制約があるなかで、寺崎は子どもたちにも馴染み深いトイピアノ（おもちゃのピアノ）による演奏を披露した（写真3）。演目は、あらかじめ大槻が科研の成果として創作した《モチーフ》をその場で5分程度の時間を使って即興的に展開したものである。2004年の秋の動物園祭りでのストリート・パフォーマンス経験もある寺崎には、限られたステージ演奏の間に幼児中心の子どもたちを惹きつけ、語りかける技が求められた。その可憐な音色をそばに寄って行って聴き入る子どもやステージ終了後に自らトイピアノを弾きに来る子どももいたが、子どもたちとより音楽的なコミュニケーションを深めるためには、ストリート・パフォーマンス形態の方が適していたであろう。

ちなみに、本イベントには静岡ウクレレクラブも参加していただき、ハワイアンスタンダード曲とともに、この機会に同クラブ指導者・竹島康博氏が作詞作曲をした《ウクレレ茶歌》と《茶刈機音頭》2曲を披露していただいた（写真4）。トイピアノは、静岡ウクレレクラブのメンバーと子どもとのふれあいの媒介にもなった（写真5）。また、学生たちは合間に手作り楽器を媒介に子どもとふれあう場面もあった（写真6）。

写真5 子どもとのふれあい（1）（撮影：小西潤子） 写真6 子どもとのふれあい（2）（撮影：小西潤子）



トイピアノおよび静岡ウクレレクラブの演奏に際しては、専門の音響スタッフに音量調整を依頼することにした。このことで、学生たちは、たった一人ですべての音響機器を持参し、配備・調整する音響スタッフの技を知ることになった。第1日目はあいにくの雨で来園者数は少なかったが、マスコミ報道があったのを受けて動物園への問い合わせもあった。第2日目の演奏に際しては、学生が不慣れであったのとスタッフの数が足りなかったこともあり、質問紙の配布・回収率は極めて低かったが、小さな子どもから高齢者まで楽しんで参加していた

(写真7、8)。

写真7 動物園来場者の様子(1)(撮影:小西潤子) 写真8 動物園来場者の様子(2)(撮影:小西潤子)



4 静岡音楽茶ロン：ヴァリエーションを創る

本イベントは、静岡県農業水産部お茶室・世界緑茶協会主催、前述の大槻・柳沢・小西の科研プロジェクト協力により、グランシップ・交流ホールで開催された。これは、静岡県茶文化普及啓発事業の一環として位置づけられ、音楽を聴きながらいつもとは異なるお茶の楽しみ方を提案する目的であり、内容は世界緑茶協会主催の第5回 O-CHA フロンティアコンテストおよび平成17年 O-CHA パイオニア賞表彰式、同コンテスト出品茶の展示、同金賞受賞茶ウェルカムティーサービス、お茶菓子付の喫茶および音楽プログラムからなる1時間半のイベントであった(写真9)。1,500円の入場料を支払って事前申し込みした70名ほどの来場者は、サロン風に設置された円形テーブル席でイベントを楽しんだ。

音楽プログラムにあてられた時間は約40分で、大槻、柳沢、小西のほか演奏者として志村朋子、小野恵子、北田裕亮、滝上裕美(いずれも4年、サクソフォン四重奏)、寺崎庸(大学院1年、ピアノ)、ツォク(大学院2年、馬頭琴)の学生が参加した。プログラム内容は、小西の解説を交えながら前述の大槻作曲の《モチーフ》およびそれを展開させた《茶歌ヴァリエ II》(ピアノ演奏・柳沢)、《茶歌即興変奏》(寺崎)、《馬頭琴による茶歌》(ツォク)《サクソフォン四重奏による茶歌変奏》(志村ほか4名)、および静岡ウクレレクラブによる《ウクレレ茶歌》と《茶刈機音頭》によって構成した。

学生は、通常のコンサート会場とは異なる場と雰囲気の中での演奏に挑戦した。学生による演奏曲目のうち、寺崎による《茶歌即興変奏》は、前述の日本平動物園でのトイピアノによるパフォーマンスのピアノ版である(写真10)。トイピアノとピアノは、鍵盤を叩いて発音する点では似た楽器のように見えるが、実は発音原理が異なる別の種類の楽器といえる。また、

トイピアノを使う場合の鍵盤の数や音色制御上の制約などから解放されるため、即興演奏の幅が広がる。さらに、寺崎は柳沢の希望により使用したウィーンのベーゼンドルファー社製グランドピアノの演奏経験は初めてであった。即興演奏には、特に場の雰囲気や聴衆の反応に呼応した展開が求められる。同じピアノ演奏でありながら、《モチーフ》をクラシック調に展開した柳沢による《茶歌ヴァリエ II》とは味わいの異なる演奏表現を試みたことで、寺崎は聴衆に音楽の可能性を示した。

《馬頭琴による茶歌》は、大槻があらかじめ示しておいた《モチーフ》をもとに、中国・内モンゴル自治区出身の静岡大学留学生・ツォクが馬頭琴演奏に合った展開を試みたものである（写真 11）。これにあたって、ツォクは幼少のころ祖父母とともに暮らしたモンゴルの草原での暮らしを思い出し、音楽的に表現したという説明を加えた。ツォクは、日常的には数字譜化や五線譜化された楽譜に基づく演奏を行っているが、今回は自らの思い出やイメージを音に託して表現することが求められた。ちなみに、モンゴル民族の間では発酵茶が飲まれている。ツォクは、馬頭琴の音色や技法を生かした豊かで安らぎを感じさせる表現を示した。

写真 9 入賞茶の香りを楽しむ来場者（撮影：小西潤子） 写真 10 《茶歌即興変奏》（撮影：小西潤子）



写真 11 《馬頭琴による茶歌》（撮影：小西潤子）



写真 12 《サクソフォン四重奏による茶歌変奏》
（撮影：小西潤子）



これらが即興的な要素が高いものであったのに対して、《サクソフォン四重奏による茶歌変奏》は、大槻があらかじめ《モチーフ》をサクソフォン四重奏用に編曲し、五線譜化した楽譜を演奏者たちに手渡しておいたものである（写真 12）。新曲ではあったが、これまでも演奏経験を積み重ねてきた四重奏のメンバーは非常にスムーズに準備を行った。そして、人間の声に最も近い音色を持つといわれているサクソフォンを使って、四重奏ならではの厚みと暖かさを

感じさせる息の合った演奏を披露した。以上の音楽プログラムに対して、会場からは「『茶歌』と聞いたときには少し古い歌をイメージしたが、ピアノ演奏はとても美しかった。」「楽器が変わると、音楽のイメージがずいぶん変わって驚いた」「お茶とウクレレの異色な組み合わせにびっくりしたが、ぴったりしていた」など、技の面白さが伝わった意見や感想が多く寄せられた。

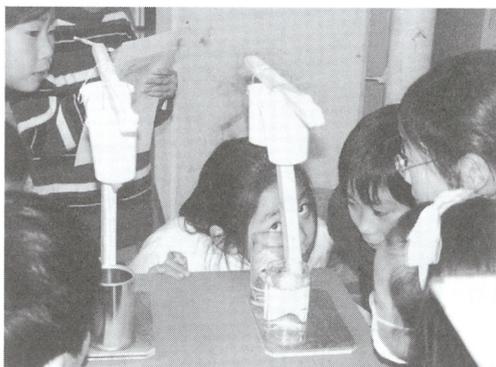
5 「水と器」：身近な素材から美しい音を聴き取る、環境教育への発展

これは、ブンテック NPO グループ代表・西村昌子氏のご提案と付属静岡小学校の音楽科・三浦、鶴田両教諭の協力により、4年3組の音楽の授業1時間を使っての実験的实践である。目標は、身近な音の世界に気づくことから環境を再発見することとした。①水滴製造器、②卓上水琴窟を用いて、水の音の多様性を子どもたちに聴き分けてもらうことから始めて、自然や生活に関わる水の音に関心を広げるようにした。特に水琴窟は、器を工夫することによって美しい水音を楽しんできた日本人の知恵の結晶であり、ここから自然や文化を考えることへ発展させられたらよいと考えた。

西村氏は約10年間、三重県内の小学校や公的な場で音に関わるイベントを主催・参加するなど、市民の視点から生活環境に関する啓蒙的な活動を行ってきた。本実践に必要な道具類やその使い方など、すべて西村氏に準備・ご指導いただいた。静岡大学からは、音楽教育専修3年高森優と同、伏木雄大が参加し、西村氏の補助をしながら水の音を作る技を学び、その面白さを小学生とともに発見した。

実践の場としては、水道設備があり比較的静穏な環境が保たれているオープンスペースを使用した。4m四方ほどの四隅に配置した児童用の机の上に、①-1単純な水滴音(写真13)、①-2森の水滴音(写真14)、②-1卓上水琴窟a(写真15)、②-2卓上水琴窟b(写真16)を設置した。子どもたちには、静穏な環境を保つこととお互いに衝突したりしないよう注意を与えた上で、各自4箇所を回りながら音の違いを聴き取り、特徴をワークシートに記入するように指示した。

写真13 水滴の音を聞き分ける(撮影:小西潤子) 写真14 森の水滴音づくりの準備(撮影:小西潤子)



①は、あらかじめセットした水が器に滴るときに発生する。したがって、ときどき水の補給が必要となる。この作業には西村氏と学生が携ったが、子どもたちから「水がなくなった」と指摘されてから対応することもあった。卓上水琴窟aの発音は、布に浸透させた水が壺に響き渡って生じる仕組みである。その非常に繊細な音を聴き取るため、子どもたちには壺に接触さ

では、無理があったことは否めない。しかしながら、鶴田教員からは「音から環境へ」という展開に興味をもった、理科の授業へと受け渡しができればよいという感想をいただいた。次に、参加学生の高森優および西村氏の感想を掲載する。

附属小実習「水の音と器」についての考察

音楽教育専修3年 高森 優

今回付属小で行なった授業の目標は、「身近な音の世界に気づくことにより、環境を再発見する」ことであった。卓上水琴窟や水滴製造器を使い、子どもたちに水の音について考えるきっかけを作った。この実践を今後発展していけるように、今回の反省点や課題について述べていきたい。まず今回の授業で子どもたちに伝えたかったことは、上にも述べたとおり「環境の再発見」である。そこへつなげるための手段として、卓上水琴窟で水の音の美しさを体験し、水滴製造器で普段聞き逃しがちな雨だれの音をじっくり聞くという活動を行った。この活動において、子どもたちは必死に4つの水の音の「違い」を聞き分けようとしていた。しかし、本来「違い」を感じてほしかったのは「雨の音2」の中での4つの器による音の違いであろう。水を受ける器によって多様な音ができるということに気づき、そこから発展して生活や自然の中にある器に目を向けさせるのがねらいであったと考える。したがって、この段階で少し子どもたちの観点と、こちら側の意図するねらいとに、差異が生じてしまったのではないだろうか。ここでは、まずは卓上水琴窟という子どもたちにとってなじみのない珍しいもので水の音に対して関心を引き、その後で山での雨の音を水滴製造器で聞くという活動までで一区切りつけるべきであったと考える。そしてさらに、同じ雨の音でも器によって違うという観点から、様々な器を使用してその音の聞き比べ活動を取り入れることが望ましかったであろう。また、今回は時間の関係で、目標である環境を考えるというところまでは到達しなかった。水の音を聞き比べたことに満足し、そのあとの身近な水の音に関する話には集中していなかったように思われる。水の音を聞いたことと、家庭での水の音や用途の間に関連性が感じられていなかったようにも思われた。やはり、ここでは時間をとって子どもたち自らが気づき、考えるという過程が必要であっただろう。そのためには、ふたつの段階を追って考えさせるべきであった。ひとつは、川や海など自然界にある水の音や器に目を向けさせ、自然環境について考えることである。もうひとつは、風呂や洗面所といった生活の中にある水の音や器に目を向けさせ、ものの大切さや人間の知恵について気づかせることである。このふたつについて別々にワークシートの欄を作り、子どもたちから気づいた点や意見を発表させるとよりよかったであろう。今後2時間扱いでこの問題を取り上げることを仮定すると、さらに発展した活動が考えられる。器の違いで多様な音が出ることに気づいたなら、子どもたちにそれぞれ器になりえるものを探したり作ったりして音を作るという創作の活動をすると音楽の授業との関連が持てる。さらに、洗濯機や風呂の変遷について考えれば社会の授業とも関連が持ててくるだろう。今回の題材は、様々な発展の可能性があると思われるので、この先教員になった際に活かしていきたい。

附属静岡小学校での水琴窟

NPO法人ブンテック代表 西村 昌子

この度は小学生の皆さんに「水琴窟」を聞いていただく機会をいただきありがとうございました。又、一人一人がそれぞれに滴の水の音を聞きわけ、擬音語などで記していただいたアンケートも拝見しました。ありがとうございました。

豊かな現代に育っておられる小学生の皆さんの感性や行動力に新鮮なエネルギーを感じ、言葉を交わしながら一緒に行動できたことは貴重な体験でした。

日本の音研究所（現・日本水琴窟フォーラム）のご好意で、10年程前、初めて地域の幼児や高齢者がいっしょに卓上水琴窟を使って「水滴の音」をきかせていただく機会がありました。その時、高齢者と幼児には聞き方の姿勢やイメージすることに大きなちがひがあることに気づきました。中でも、普段は先生の制止の言葉にもかかわらず落ち着きなく動き回る幼児が、「水琴窟」の音を聞きはじめたらにっこりと穏やかな表情に変わり、静止状態になる場面がありました。大人たちはその表情に感動し注目しました。

一方高齢者は水琴窟を囲んで、「水」をテーマに一人が語りだすと、初対面にもかかわらずとめどなく話が続くようでした。そして私は、子どもの頃父に対して反抗心を募らせたあらしの海に飛び込んだ人命救助の話、カツオの一本釣りをしていた漁師時代の話、小笠原で雨水をためて使った生活の話など思いだし、父の背景にあった生活環境や人生観、それを受け止める子供時代の私の生活環境などについて考えるようになりました。

それからは機会があると子どもたちと一緒に、「水琴窟」を聞いたり伝統音楽を楽しむ会に参加させていただいていますが、生活感覚の違いや子供たちの繊細で豊かな感性と表現力に驚いたり感動したりとの連続です。

今回も授業終了後に、一人の生徒さんが杓を使って「あっ、こんな水の音ができた！」と「音」を作っている場面があり、新しい何かがはじまりそうな気がしました。

小西先生の「五感を働かせ、体と頭を使って試行錯誤を積み重ねて自己表現」の学習環境づくりの企画に次世代社会のエネルギーを感じさせていただきました。

私は同世代やもっと高齢な地域の先輩たちにまちの歴史を学びながら、仲間と体験を語り合ったり、時には創作音楽物語などの表現活動を試みたりして「まちの総合学習」で世代間が協働してまちづくりに参加できるよう模索することを楽しみたいと思っています。

6 箏講習会

これは、2日間計4時間を使い、宮城社大師範・吉田理世、箏曲指導者・吉田道美をお招きして、初心者向けへの箏演奏指導を行ってもらったものである。小中学校での和楽器指導が定着してきたなかで、学生が和楽器に触れる機会はまだ十分だとはいえない。今回は、授業としてではなく、前述の大槻・柳沢・小西による科研プロジェクトとの合同というかたちで実施した。参加者は大槻、柳沢、小西の各教員、森有世（教育学研究科2年）、今村圭（同1年）、小泉あゆみ（音楽教育専修3年）、池内友美（同）の学生4名のほか、外部から中学生1名、音楽療法士2名であった。これだけの短期間ですべての技を身につけることは、到底無理であることは最初から想定していたが、体験することで演奏やCDを鑑賞するだけではわからないことや、技の豊富さを知るには十分であった。最後には、《さくら変奏曲》を3部で合奏することもできた。

写真17 技の説明を受ける（撮影：小西潤子）



写真18 調弦の指導を受ける（撮影：小西潤子）



7 まとめ

以上、今年度は多様な技を多様なやり方で知ることができた。反省点をあげるときりがないが、どれもこれもがレベルの高い技であっただけに、到底習得に至るものではなかった。ただ、教員自らがすべての技を身につけるといえるのは、そもそも無理なことである。また、大学ですべての技の習得を完全に行うことも不可能である。地域には、たくさんの「技の達人」がいる。大学教育においても初等教育においても、学の中に閉じた形ではなく地域の人々の知恵と力を借りながら、共に協力し合っって子どもたちの熱中を引き出すための方策を練っていくことで、双方の発展性につながる未来が開けるのではないだろうか。そのためにも、まず地域にある技を知ることが大切であろう。

参考音源

《DABADA》 『香り豊かなひととき』 キングレコード KIPC1000.

《太陽の子どもたち》 『LISA ONO, SERENATA CARIOCA』 BMG ビクター BVCR-87.